
アンジェリーク | Ernst | 星降る夜に

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンジェリーク―Ernst―星降る夜に

【Nコード】

N9607I

【作者名】

翠

【あらすじ】

【エルンスト×リモージュ】新宇宙（聖獣の宇宙）に現れた謎の大陸アルカディア。そこでは元の世界に戻るため、宇宙を救うため、皆がみな様々な努力を重ねていた。王立研究員主任のエルンストは謎を解明するために寝る間も惜しんで調査を行っていた。

（前書き）

KOEIから発売されているネオロマンスゲームシリーズ
「アンジェリーク」の二次創作です。

原作やキャラクターイメージを壊してしまうおそれがあります。
また、ネタバレも含まれますので、それらを十分ご理解の上、
ご覧いただけますと幸いです。

アルカディアにある王立研究院は眠る事を知らなかった。

いや、『彼がいる王立研究院では』の間違いかもしれない。

そう、“彼”とは王立研究院の主任を務め、アクアマリンを映したような髪に、ペリドットを思わせる瞳を持った、“超”がつくほど真面目なエルンストである。

彼は、どうすれば元の宇宙に戻るのか、このアルカディアがどういう所であるのか、育成をどのように進めていけば幸福値が上がるのかなどを日夜研究していた。

ふう……。

エルンストは、大きな溜息をつきつつも、目の前の画面から視線を外すことも、キーボードを打つ指を休める事もしなかった。

「一体いつになったら、元の宇宙に戻る事ができるのでしょうか…

…」

女王陛下をはじめ、守護聖や協力者たちは自分に出来る事を一生懸命していた。

エルンストも自分に出来る精一杯をしなければと、一日の殆どを研究院で過ごしていた。

元の宇宙に戻る為に。

アルカディアを開放する為に。

——なにより、大切な女王の為に。

長い時間、自分以外のものが音をたてることのなかった静かな空間は、扉の開く音とそれに続く心地よい声によって失われた。

「エルンストさん？」

遠慮がちに訊ねる声は、彼がもっとも愛している女王アンジェリークのものだった。

終始画面に向けられていた厳しい瞳はとたんに甘く優しいものになり、キーボードから離れることはないのではないかと思われた指は止められ、めがねを整えさせた。

「ああ、アンジェリーク。あなたでしたか」

普段他のものではなかなか見る事のできない穏やかな微笑みを浮かべ、座っていた椅子を回転させてアンジェリークの方に向き直る。

「エルンストさん、ちゃんと食べていますか？ それに、眠っていますか？」

エルンストのすぐ側まで来ていたアンジェリークは、心配そうにエルンストの顔をのぞきこんだ。

「……………」

エルンストは正直に食べていない、休んでいないとは彼女が心配するから言えず、だからと言ってウソをついたとしても、彼女にはなぜかすぐにばれてしまうためにこれまた言えず、結局黙り込んでしまった。

エルンストの反応に、アンジェリークは悲しそうに瞳を曇らせ小さな溜息をついた。

「エルンストさん、お願いですからお食事はちゃんととってください。それに、ちゃんと休んでください。私、エルンストさんが倒れてしまうと心配で何も出来なくなってしまうです」

想像力豊かなアンジェリークは、エルンストが倒れた所を想像してしまったのか、胸の前で握りあわせていた手を震わせ、宝石のような瞳には涙を浮かべた。

その様子を見て、エルンストはあわてて弁解する。

「ああつ、も、申し訳ありません。今から……そう、今から軽く食事をとって休もうと思っていたのですよ。ですから大丈夫です。これから、あなたに心配をかけないように気をつけますので、どうか、泣かないでください。私の方こそ、あなたに泣かれてしまっは、どうしたらいいのかわからなくなってしまうです」

アンジェリークは涙でうるんだ瞳でまっすぐにペリドットの瞳を捕らえ、鋭い言葉を投げかける。

「また栄養補助食品ですか？　休むってそれを食べる間だけですか？」

アンジェリークの鋭い突っ込みに、エルンストは内心冷や汗をかきながら務めて冷静を装って答える。

「いえ、本日はここまでにして続きは明日にします」

「明日って、後30分もすれば明日になっちゃいますけど？」

……………するどい。

なぜ、彼女は普段のふわふわした雰囲気からは想像もつかないほど鋭くなる時があるのか。

エルンストはまたも内心汗だくになりながら、一所懸命言葉をさがす。

「あ、いえ。本日は本当にちゃんとした食事をとって、明日、日が昇るまではベッドで休む事にしましょう。……これで安心でしょうか？」

おそろおそろアンジェリークを見ると、彼女はほっとしたように微笑み、どこかうきつきとした様子でエルンストの腕に自分の腕を絡めて外へ向かって歩き出した。

「さ、行きましょう。エルンストさん」

「は!？」

彼女の行動が読めず、エルンストの頭の中はフリーズしたまま引きずられて行くと、研究院を出て少し歩いた所にある見晴らしのいい野原にピクニックシートがひかれ、バスケットやポットなどが用意してあった。

エルンストは混乱した頭を落ち着かせ、ようやく言葉を紡ぎだした。

「あ、あの……アンジェリーク。これは一体……」

アンジェリークはうれしそうにバスケットを広げ、サンドイッチやフルーツなどを取り出し、ポットからは温かい飲み物をそそいでいる。

香りからしてハーブティーだろう。確か催眠効果があったはずだ。

「エルンストさんに食べて欲しくて頑張って作っちゃいました。ゆっくり身体を休めて欲しいから暖かいハーブティーも」

にこにこ微笑んで、アンジェリークは「はい」とエルンストに湯気の立ち上るマグカップを差し出した。

呆然としつつも暖かいマグカップを受け取り、立ち上る湯気を見つめハーブの香りに包まれると、いつのまにか責任感ががちがちに

固まっていた心が優しくほぐされて行き、ひとくち口に含むと、身体の中から暖かくばかばかしたものに包まれるように感じた。

——あなたにはありません。 アンジェリーク。

エルンストは、今までにない穏やかな微笑みを浮べてアンジェリークを見つめた。

アンジェリークは一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに笑顔になってエルンストをふわりと抱きしめた。

「今日は星がたくさん降っていてとてもきれいなんです。だからエルンストさんと一緒に見たくて抜け出して来ちゃいました。それにエルンストさん全然休んでないと思って」

愛しい存在が自分を抱きしめている現実慣れず、硬直してカップを落としてしまったエルンストだが、アンジェリークの言葉に思わず事実を口にしてしまう。

「星が……？ ああ、あれは虚無の空間にアルカディアの周りにある星々が飲み込まれていつているのですよ。早く何とかしなければこのアルカディアも例外ではありません」

……………。

二人の間に沈黙がながれ、エルンストは言ってしまった言葉の重

大さに今さらながら気がついた。

——私はなんということを言ってしまったのだ……
彼女が必死に頑張っているというのに！

「……もう。エルンストさんったら正直なんだから……」

抱きしめている腕にもっと力を込め、肩を震わせているアンジェリークは、どうやら泣いているようである。

「あ、あの、アンジェリーク？」

何を言ったらいいのか、完全に混乱してしまったエルンストの口からは、彼女の名前しか出てこなかった。

「私、頑張りますから」

アンジェリークは、抱きしめている手でぽんぽんとエルンストの背中を叩き、頬をすり寄せた。

「頑張りますから、エルンストさんはもうちょっと肩の力を抜いてくださいね」

「アンジェリーク……申し訳ありません。いや、ありがとうございます」

エルンストはそつと彼女を引き離し、やわらかな両頬を包み込み、自分の方に向かせると優しく涙を拭って微笑んだ。

「アンジェリーク、あなたのほうこそ無理はしないでください。私はあなたの役に立てるなら自分の食事や睡眠時間など全く惜しくなどないのですから。でも、これはあなたにしかられますので、これからは注意することにしますけどね」

少しおどけて見せるエルンストにアンジェリークは思わず笑ってしまう。

「やだ。エルンストさんったら」

二人でくすくすとひとしきり笑った後、アンジェリークの提案で遅い食事をとることにした。

美しい星空を見上げながら、自分のために心を込めて作られた食事を口に運び、愛しい人が横にいて微笑んでくれている。

——なんと私は幸福なのでしょう。

こんな穏やかな時間が私にあるなんて、思いもしませんでした。

おいしい料理に暖かいハーブティー、隣には強力な精神安定剤……この状況で眠くならない者がいるはずもなかった。
エルンストも例外ではなく、しばらくすると崩れ落ちるように眠ってしまった。

「やだ、どうしよう。エルンストさん？ エルンストさん？ 部屋で休まないと風邪をひいいちやいますよ？」

アンジェリークは必死にエルンストを揺らして起こそうとするが、連日の睡眠不足のおかげで彼の眠りはとても深いものになっており、まして側には一番心を許せる人がいる状況ではエルンストの眠りは簡単に覚めそうになかった。

少しの間呆然とエルンストを見つめていたアンジェリークだが、意を決したようにてきぱきと後片付けをし、研究院へと走っていくと手に持てるだけの毛布を担いで戻ってきた。

そして、敷き詰めた毛布の上に、なんとかエルンストを寝かせて毛布をかけ、自分もその横にそつと寝転ぶと、うれしそうにエルンストの寝顔を見つめていた――が、彼女もいつしか眠りの精に抱きしめられていた。

翌朝寝室にアンジェリークがいないと大騒ぎになり、もう一人の女王、補佐官、守護聖、協力者たちが大騒ぎして彼女を探し回り、やっと見つけ出した彼女は爆睡するエルンストの腕の中で幸せそうに眠っている姿で発見されて、も一つ大騒ぎになるのはもう少し後

の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9607i/>

アンジェリーク | Ernst | 星降る夜に

2010年10月21日21時50分発行